

禅の友

Zen no Tomo

11

November 2025





ご本山だより

大本山永平寺

【首座法戦式】

大本山永平寺
福井県吉田郡
〇七七六・六三・三一〇二



永平寺の山内が、ひと際緊張感で包まれるのが首座法戦式です。

首座とは、修行僧の筆頭、第一座のことです。夏と冬の制中（禁足修行の期間）の間にそれぞれ一人ずつ設けられる配役で、皆の模範となり修行生活をけん引していきます。その首座による大禅問答が法戦式です。

冬の制中が始まり、法戦式はそれから十日ほどたつてから行われるのが通例です。制中が始まった山内の緊張感と、まだまだ初々しい首座の昂る気持が相まって修行道場全体が張り詰めたような雰囲気になります。

その中で首座は二十五人の問者による問いに迫力満点の大きな声で答え、自らの境涯を明らかにしていきます。問答をかける問者も緊張します。一世一代の場に挑む首座に、中途半端な態度で臨むことは出来ません。自らも精一杯に声を出し必死に問答をかけ続けるのです。

道元禅師さまは入越する前に京都で興聖寺というお寺を開かれました。道

元禅師さまを堂頭とした日本曹洞宗の初めての道場です。そこで初めて首座に就かれたのは、永平寺二祖となる懷奘禅師さまでした。懷奘禅師さまは生涯をかけて道元禅師さまに従い、その教えを正しく伝えようとお言葉を記録し、著作を書写しました。そのお蔭で現在まで道元禅師さまの教えが伝えられております。

また、永平寺三祖の義介禅師さまが開かれた大乘寺で首座をつとめたのは道元禅師さまとあわせて両祖と称される瑩山禅師さまです。

瑩山禅師さまは多くの優秀な弟子を育て、道元禅師さまの教えを正しく伝えられました。現在、曹洞宗の教えが余すところなく広がっているのも瑩山禅師さまのお蔭です。

今、懸命に禅問答を行う首座や問者たちはこれからのような和尚になっっていくでしょう。お祖師さま方と同様に、道元禅師さまの教えを正しく学び、正しく伝えてくれることを願って止みません。



ご本山だより 大本山總持寺

【ご移転記念と制中五則】

「月明水潔秋天淨 豈有片雲大清」

（月は明るく水は清く秋の空は澄み渡っている「仏性」まるごと清らかなこの日を曇らせる一片の雲もない）

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二二



巡察中、臨時首座寮にて展茶

標題は瑩山^{けいざん}禪師著であります『伝光録』の三十二章からとった一文です。眞実は澄んだ心に映し出される。その心は偽りも迷いも付け入れる隙もないほど^{きよ}淨らかだ。禪では自身が置かれた状況を率直に受け止め、心眼をもって自身の生き方を実践することが大切なのです。

十一月五日は、今から一一四年前の明治四十四年に總持寺が能登から鶴見へ移転し、その遷祖^{せんそ}式が現在の放光堂で盛大に行われた日です。

この日ご開山瑩山禪師・二祖峨山^{がさん}禪師を始めとするご眞牌（お位牌）が能登より移され、これをもって正式に本山が移転したことになります。

本年は十月二十六日に、ご移転記念行事の一環として「第十一回夢ひろば

in總持寺」と「萬燈供養会」が鶴見大
学の「紫雲祭」と同時開催することになりました。

さて、總持寺は十月より来年一月までの三カ月間、禁足修行の冬安居^{とうあんごけつ}結制^{せい}の最中です。中でも今月十三日から十七日までの五日間は「制中五則」の期間で、最終日には「首座^{しゆざ}法戰式」が行われます。大衆を束ねる役の「首座」が二十五の問答を取り交すのも庄巻です。

二十一日は總持寺を開かれた瑩山禪師の降誕会^{ごうたんえ}です。つまり、文永元（一二六四）年越前国・多禰^{たねむら}村（現在の福井県越前市）の觀音堂敷地内でお生まれになった誕生日であります。この日は大祖堂^{だいそどう}で石附禪師ご親修にてご誕生をお祝いする法要が営まれます。

選・坊城俊樹

蜘蛛の囀の蜘蛛は囀のごときとも

愛媛県 井上 征郎

評

逆転の発想とも言えるが、なるほど面白い視点。蜘蛛とは自分の巣の中央に居る。よく見るとそれはあたかも蜘蛛自身が囀となつてゐる姿にも見えるという。そう言われれば蜘蛛とはまこと頭の良い生き物なのか。あるいは神仏がそうさせた賜なのか。

円相をつくりて眠る秋の猫

愛知県 渡辺 秀子

評

皆さんはご存じだろうが、円相とは禅僧などが完全の悟りのために描く円のこと。この猫はそれを知ってか知らずか、丸まった姿が円を描いているようにも見えた。この着想の面白さは秀逸。秋の爽やかな季節にぐっすり眠る猫の姿が明瞭である。

◆ 妻はべつたんこの靴夏の渋谷

静岡県 末光 愛正

◆ 秋風や叫ぶ埴輪の声を聞く

鳥取県 眞山 博充

◆ 真の闇残して果てし大花火

島根県 藤江 堯

◆ 丁寧^{ていねい}に水を撒きたる原爆忌

山口県 御江 恭子

◆ 優曇華^{うどんげ}の妖しき命火屋^{はや}に垂る

宮城県 金升 富美子

◆ 旧字體旧かなづかひホウの秋

福岡県 嶽本 由美

◆ ほてい様腹の涼しき置き処

愛知県 松井 暁美

◆ 原爆忌わが青春は遠くなり

鳥取県 徳本 義則

◆ 爪紅の散る辺にしやがみ姉妹

岐阜県 大下 雅子

◆ はつたいに噓せて望郷とも違ふ

大阪府 柏原 才子

選者吟

秋蟬は白き看護婦へと鳴けり

俊樹

作句小見

私事で恐縮だが私の母は戦前からの看護婦であつた。現代では看護師と呼ばねばいけないらしい。しかし母と話した思い出としてやはり看護婦のほうが良いと言う。女性ならではの細かくて愛情のある看護という仕事に誇りを持っていたからである。

選・長澤 ちづ

あまはらし
雨晴海岸は風きみと見るいにしへ人の寝
めし立山

岐阜県 後藤 進

評 この「いにしへ人」は越中守大伴家持のことで、富山県の雨晴海岸から見る立山の美しさを詠む歌が万葉集に残されている。そんな背景のもと大事な人と見る立山の美しさ、格調高く簡潔に詠われている。

夏空に白線を引き飛行機が平和日本を
ゆつたりとゆく

静岡県 高尾 善五

評 飛行機雲を夏空の白線と捉えたところが鮮明。飛行機それ自体は高速で進むわけだが地上で見守る作者の気持がゆつたりなのだ。平和を持続させる努力を私たちは怠ってはならない。

◆ 散る落ちる崩れる萎むそれぞれの花の終はりを庭に見てをり
北海道 加藤 智子

◆ 朝の経務める最中じりじりと迫りくるがに蟬時雨降る
愛知県 深谷 ハネ子

◆ 暑さに負けてならじとど録の刃先に汗は光りしたたる
鳥取県 徳本 義則

◆ ふじ色は即母の色番段着の八卦け襷せしふじ色なりき
兵庫県 前田 あつ子

◆ しんとしてあたかも映画のワンシーン人影のなき炎天の町
神奈川県 竹村 真砂美

◆ サツチモの濁声流るラジオから夜明けは近い山鳩の鳴く
岐阜県 丸山 正己

◆ エアポツズ入れて雨音聴く朝よ半月ぶりなる八月の雨
静岡県 杉原 民子

◆ 避難して早く来たんとせと電話くれし友の家めざすりユツクかつぎて
岩手県 阿部 照子

◆ カップ麺半分残す母ちゃんを帰郷のたびに見るのがつらい
京都府 三浦 大示

◆ 迎え火に線香花火を点したり窓に交うカナブン二匹
福井県 永田 弘子

選者誌

「もの言えよ」雨後の柳に呼びかけしかの人想い
西行想い
ちづ

作歌小見 今年の夏の暑さは過去の記録を大きく書き換えるものでした。深谷さんの「蟬時雨」、徳本さんの「刃先に落ちる汗」、竹村さんの「炎天の町」は、その暑さに負けぬ力で拮抗しています。